
ひとの女（もの）

海山ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとの女^{もの}

【Nコード】

N6377Z

【作者名】

海山ヒロ

【あらすじ】

そう。

なにを血迷ったんだがいまだに分らないが、昨夜の俺は、どう考えても自分らしくはなかった。

自慢じゃないが、これで堕ちなかった女はいない必殺の笑みを浮かべた俺にむかって、まったく、信じられないことにまったく気のない様子で、彼女に、あのつぶやきを聞かれたのがまずかったのだろうか。

(前書き)

ブログからの転載。

なんなんだこの女は。

「ああそうですか。……お気になさらず」

傲慢じゃないが、これで堕ちなかった女はいない必殺の笑みを浮かべた俺にむかって、まったく、信じられないことにまったく気のない様子で、彼女はそう生返事を返してきた。

彼女は俺が、すでに彼女の聖域となっているらしいこの書庫にはいつてきた瞬間は、確かに驚いていた。

それはそうだろう。

昨夜、初対面でのっけから挑発するような言動をとっていた義理の息子（予定？）が、一夜あれば心から（もちろん素振りだけだが）の謝罪と極上の笑みを差し出したのだから。

そう。

なにを血迷ったんだがいまだに分らないが、昨夜の俺は、どう考えても自分らしくはなかった。

恋愛至上主義の親父に言われるまでもなく、生れも育ちも正統イタリア男を任じる俺は、いついかなる時も、己と対をなす性である女性に、優しく接しするのを信条としてきた。

それがたとえ乳母車にのった幼児であろうと、杖にすがらねば歩けない老女であろうと、歩くときには道をゆずり、さりげなく手を引き、椅子に座ろうとすれば椅子をひき、重い荷物はすべて引き受け、

服装や髪形、所作への贅辞を忘れない。もちろん常に最高の笑顔つきで、だ。

それが昨夜、もろくも崩れ去ったのである。

この女を前にして。

「その無邪気な顔で親父をたらしこんだのか……」

いまはまったく届いてないらしいこのつぶやきを、最初に聞かれたのがまずかったのだろうか。

[illegible]

「えっ……」

「はじめまして。息子のロレンツィオです。まあロイとでもレオとでもお好きなように」

親父にエスコートされてサロンにあらわれた女に、まずは気さくな挨拶を。

「……はじめまして」

聞き間違ひとでも思うことにしたのだろう。若干いぶかしげに眉をひそめながらも、挨拶を返してきた。

差し出された小さな手に気づかないふりをして、愛しげに彼女を見おろす親父にも、先制パンチを。

「親父も今回はずいぶん趣旨がえをしたものだ。才色兼備のルクレツィア女史とはどうなったんだい？」

「——お前に私の交友関係を説明する義務はない。そして私は、レディの前で下世話な話をする男にお前を育てた覚えもない」

さあおいでなすった。10代半ばまで俺を震え上がらせた魔王様のご登場だ。

「彼女はわたしの大切なゲストだ。そんな不愉快な態度をとり続けるつもりならば」

アルプスを吹き下りてくる風よりも冷ややかな親父の声をさえぎったのは、意外にも傍らにたつ女だった。

「お話をきいても申し訳ないですが、よろしいですか？」

気遣わしげに謝罪を口にする親父を制し、彼女は一步足を踏み出すと、俺の真正面に立った。

「たしかあなたとは、初対面だったと思いますが。何かお気に障ることでもしました？」

淡々と。ただ事実のみ確認するように、見あげる黒い瞳。

「…………いや。あえて言うならあんたの存在そのものが気に障るだけだ」

黙っていればひどく怜悯に見えるといわれる見た目を存分にいかして、覆いかぶさるように彼女を見おろし俺は言い放つ。

泣けばいい。

何故か、凶悪な思いに駆られていた。

「ロレンツィオ！」

その狂暴な感情は、穏やかな紳士の仮面をかなぐり捨てて、彼女をうしろに庇おうとする父親に向けてか。

その手にそつと手をそえて制止する、目の前の女に向けてか。

「ただのゲストなら、お上品ぶってみせるさ。だがな親父殿。『会わせたい人がいる』なんて俺を呼びだしたのは、母さんが亡くなつて初めてだろう。まさかこの年で年下の母親を持つはめになるとは思わなかったぜ」

「――年下？」

それまで俺がぶつける言葉のつぶてを無表情で受けていたそのちいさな顔が、はじめて動いた。

綺麗な弓型の眉のその片方だけだが。

「東洋人が若く見えるのは知っているが、あんたはどうサバを読んでも俺より5つは下だろう」

俺を見あげるすべらかな丸い頬。

しわもシミも見当たらないすっきりとした額。

あどけなさすら漂うそのアーモンド型の瞳を最初に見た時、親父がついにロリータに走ったと内心あせった。

そんな内心の想いは隠してあくまで小馬鹿にしたような俺の言葉に、

まるで父親を盗られてすねる5歳の子供のような昨夜の自分を苦く
思い出しながら、俺は呟いていた。

完璧に自分の世界に入って戻ってこない、目の前の女にはもちろん
聴こえていないようだけれど。

本当は、昨日の夜が、この女をみたはじめてじゃない。

なにが嬉しいんだか、羊皮紙にかがみ込んだまま微笑みながらつぶ
やく、本の虫。

たぶんこれがいつもの彼女のスタイルなのだろう。つややかな黒髪
をいさぎよく後ろでひとまとめにして、身にまとうセレーノな……

夏の夜、見上げる空の色のような青いワンピースは、見た目より着
心地で選んだようなデザインだ。

もちろんその小さな顔には、口紅すらはいていない。

でも昨日は。昨日の午後は。

サロンでは、親父贈ったのであろう、身体にぴったりとそうドレス
を身にまとい、結いあげた髪も美しく、ぷっくりとした唇には紅い
花。

そのすこし前、親父にこの書庫で組みしかれていた時には、おくれ
毛が汗でなまめかしくそのほっそりとした首筋にはりつき、キスで
腫れた唇は、唾液でぬれて光っていた。

夕食に遅れないように、昨日はフィレンツェ市街にあるオフィスか
らそのまま愛車を駆ってきた。おかげではやく着きすぎた俺は、久

しぶりにこの中庭を散歩する気になったのだ。

専門家いわく、「類まれな」先祖伝来の蔵書を日にさらさないように、そして防犯上の理由からも、この書庫の、庭に面した窓は細くきつてあるだけだから。

だから、すべてが見えたわけじゃない。

ただ、いまはきっちり襟もとまでとめられたボタンで隠されている、意外にゆたかな胸元であるとか。

後ろからのしかかる親父が身動きするたびのけぞる白い喉だとか。

耳朵をはみ、耳元でささやかれ（ているであろう）睦言に、柳眉を寄せてふるふると振られる赤い顔。

喘ぎを押さえようと（しているように見えた）、きつく噛みしめられた唇。

強すぎる愉悦にたえかねてか流れる涙。

そう言ったものが、いま目の前で古の宮廷で遊ぶ本の虫でもなく、サロンにあらわれた理知的で穏やかな笑みをうかべた淑女でもなく、匂いたつような色香をまとう女が、そこにはいた。

そう。

思い出すだけで腰にわだかまったままの熱をよびもどす、女が。組み敷いて、気がすむまで啼かせたくなる、女が。

たとえばひとのものであっても。

(後書き)

おもいつきのみで描いたものです。
お気に召されれば。

続きは……、描くかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6377z/>

ひとの女（もの）

2011年12月21日14時53分発行